［自伝小説］

わが道を求めて（第六回）

人間をはぐくんでくれるもの

長崎　明
さしえ　竹内秀明

夕餉のさんざめき

夕食の仕度ができた。

「おじいちゃんはどこに座ろうかな」

「孫たちはあっちのテーブルで先に食べさせるから、おじいちゃんとお父さんと伸夫君は、こっちのテーブルでお酒でも飲んでてちょうだいな」

「そうだな、子どもは子どもどうし、大人は大人どうしとするか。そして、久し振りに一ぱいやるか」

「わあ、大人はずるいんだ。大人ばっかりお酒飲むんだもの」
「そうね。じゃあ、あんたたちにはジュースをあげようか」
「でも、よなかに、おもらしするとたいへんだ」
「大きい子どもたちは大丈夫だろうけど、小さい方はどうかな」
「だから、ちっとにしときましょうね」
　三月の春休み。山形で中学校の教員をやっている長男夫婦と孫三人。東京で保育園勤めの長女夫婦と孫一人。新潟で共稼ぎの次男夫婦。それに我われ老夫婦二人。計大人八人、子ども四人。めったに揃うこともない。
「村松の大おじいちゃん、大おばあちゃんも一緒だと良かったのに」
「だって、寝るところがないもの」
「寝るのはどこでも寝られるけどさ。まだ寒いから、ふとんが足りないんじゃない」
「そうね。夏休みになったら、又おいでよ。そうしたら、村松からも来て貰いましょう」
「うん、そして、夏は庭でバーベキューしようよ」
「七輪に炭をおこして、鉄板でバーベキューやるの」

すき焼の味付け

「さあ、おじいちゃん、すき焼の味付け、お願いね」
　わが家では、世帯を持って以来、すき焼の味付けはこの私と決まっている。
　そして、その味の付け方は台湾で覚えたままである。今でも変わらない。
　すき焼鍋を良く熱してから、先ず豚の脂身を焼き、融けた脂肪が鍋となじんだら、豚の赤身、長ねぎ、糸こんにゃく、焼豆腐を入れてしばらく煮る。近頃の豚肉は脂肪が少ないので、ナタネ油で焼くことが多い。この時、酒と調味料で予め用意したタレを使うと良いのだが、大抵は手加減で、酒、砂糖、醤油を順番に入れる。その後、生しいたけ、エノキダケ、ほうれん草、白菜などの野菜を煮る。酒、砂糖、醤油の分量によって微妙に味が違う。若い頃は、どちらかといえば、濃い味を好んだが、最近は血圧を心配して薄味にしている。子供や孫たちには少し物足りないかも知れない。
　とにかく、これが、台北高等学校剣道部のコンパで覚えた手順である。そのコンパは、確か一九四〇年(昭和十五年)の秋、私たち新入部員の歓迎会の時だった。それも最初で最後のたった一回きりだった。その

翌年十二月八日には大日本帝国海軍の真珠湾奇襲で太平洋戦争が始まったから、二度とすき焼コンパの歓迎会ができなかった。

台湾では豚の飼育が盛んで、すき焼といえば豚肉だった。しかし、それも、一人当り四〇グラムもあれば大ごちそうだった。昨今、学生たちのコンパではその十倍も使っている。それも、霜降り入りの牛肉を、である。

新潟に住むようになって、新潟県も殆んど豚肉なので、しばらくは関西のように牛肉を使うことがなかった。牛肉を使うようになっても、味付けの手順は相変わらずである、女房も手出しをしようとしない。

おばあちゃんとお母さんはビールを汲み交わしている。すき焼がこげつきそうになると、そのビールを横取りして鍋に入れては叱られる。

孫たちは早くも食事を終えて、ミカンを食べ始めた。今年、ミカン農家は豊作貧乏をかこっている。農林省のお声がかりに真面目に従ったためである、この上、牛肉、オレンジの自由化となったら、生産者は気の毒だ。国内産の牛肉、ミカンをうんと食べたら、自由化を少しは抑えられるかと、農学部教授らしからぬ、都合良い理屈をつけてみる。

渡台の経験

「それにしても、村松の大おじいちゃんと大おばあちゃんは、よくも台湾に渡る決心をしたもんだね」

孫たちが一しきり付いたのを見届けて、次男の伸夫が口を開いた。それを契機に、大人たちだけで、夕食前の語合(かたら)いが続けられることになった。そこで郁夫が、いかにも兄貴ぶって応じた。

◇郁夫

大おじいちゃん自身が書いた「長崎武の歩み抄」を良く見ると、試験検定で小学校本科正教員の免許を受けてから台湾に渡るまでの二年五カ月の間に、曽野木、村松、川東、下新、長沢と五回も転勤している。しかも、その間に結婚してお父さん（明）と叔母さん（悠子）が生まれている。しかし、いかに転勤が多かったとはいえ、それだけで、故郷を離れて、遠く台湾に移住しなければならないことになるのだろうか。

◇康子

そうね。転勤が多いといっても、それじたいは若夫婦にとってそれほど苦痛でなかったかも知れないわね。もう一つ考えられるのは、多分、二〇歳そこそこの小学校訓導の月給では、家族四人を養うには足りな

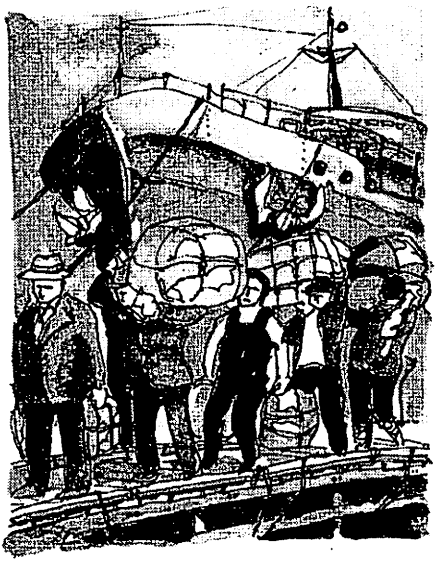
かった。台湾に渡れば少しは割増が付いたのじゃないかしら。

◇郁夫

さあ、どうかな。転勤が多いのも、月給が安いのも、何年か経てばだんだん良くなる筈だから、あまり渡台の理由になりそうもないね。ひょっとしたら、大おじいちゃんは師範学校卒業ではないので、その頃既に師範閥があったとしたら、師範閥の狭間で必ずしも自由ではなかったのかも知れない。

◇伸夫

大おじいちゃんの手記によると、一九二五年（大正十四年）一月悠子叔母さんが生まれ、三月南蒲原郡長沢小学校に転勤した頃、



母の従弟にあたる細野英三氏が若くして台湾にわたり教員となり、たまたま帰省中の同氏より台湾の気候、風土、教育事情等につき話を聞き、心を動かされ、父母を説得して渡台の決心をする。

とあり、続けて「その年の五月一日に台湾公学校乙種教員の免許を取得し、五月十五日に神戸港から笠戸丸に乗船し、基隆港に上陸。台湾への第一歩を印し、乳呑子二人を抱えての台湾での生活が始まる」とある。

◇明

公学校というのは台湾の現地の人の小学校に相当するので、少しは台湾語や台湾事情を知らなくてはならなかったのだろう。上陸後一ヵ月ほどの講習を受けてから、基隆郡四脚亭公学校に赴任している。

それはともかくとして、伸夫の推測がマトを射ているかも知れないね。

お父さんの考えではね。村松の大おじいさんは、学校の先生として何か大きな夢を持っていて、それを台湾で叶えてみたいというロマンがあったのではないか。そのロマンを実現させるのには、新潟の環境が狭過ぎたのではないかと思うね。

父、武の若き日の夢

再び「長崎武の歩み抄」から

一九二四年五月五日、下新小学校訓導。同校に千葉師範の手塚主事を招き、自由教育講習会を開き、県下に卒先、革新的自由教育の実行に努む。

ところが、それから丁度一年後に離郷、渡台している。

父、武の自由教育の一端を忍ばせる逸話がある。

私が岩手大学から新潟大学に転じたのは一九六六年（昭和四一年）だった。着任後間もない頃、一人の農学部教授がわざわざ私の研究室においでになった。この自伝小説はできるだけ実名を使わないつもりなのだが、この教授はそのお人柄を下手に説明するよりも、お名前を挙げた方が却って失礼に当たらないと思うので、あえて書かしていただく。当時、林学科林業経営学の教授で、今は新潟大学名誉教授の石黒富美男先生である。

私は先輩教授の突然の来訪に驚いた。私には同教授にそれまでお話の機会がなかったが、教授会（当時は教授だけの教授会だった）の際に、その端整なお顔とやや伏眼がちに口ごもるようなお話ぶりが印象的で、何か高貴なご出身かと拝察申し上げていた。同教授はいかにも云い出しにくそうに、「貴方の教授昇任のための個人調書によると、本籍が中蒲原郡村松町になっているが、そのとおりですか」と切り出した。「そうです」と答えると、「では、新町ですか」と重ねてお尋ねになるので「はい。でも、それがどうかしましたか」と聞き返すと、「それでは、貴方のご尊父様はタケシさんとおっしゃるのですか」と、いきなり父の名前が出て来たのに私は又々びっくりするばかり。

「実は、ご尊父様は、私が村松小学校の頃の先生に違いありません。村松町の長崎とおっしゃるので、もしやと思ったのですが、やっぱりそうだったのですね。どうして覚えているかというと、私はご尊父様のお蔭で児童劇に出させていただいたのです。ご尊父様は中学校を卒業してすぐに先生になられたので、確か私と幾つも違わぬ若い先生でしたが、とても先進的な教育をなさるお人でした。その頃、小学校の学芸会というと、文部省選定の唱歌を唄うとか、決まり切ったせりふを紋切り型で話す児童劇くらいなものでしたが、長崎先生は、唄い踊りながら劇をする歌舞劇をやろうということで、私を抜擢してくださったのです。私は幼い頃から身体が弱く沈みが

ちな子だったのですが、長崎先生にお励ましをいただきながら、何とかその劇をこなすことができました。それが自信となって、今日あることができたのです。劇の題名もせりふもすっかり忘れてしまいましたが、長崎先生は私の一生忘れ得ぬお人になりました。あの時代に歌舞劇を小学校の学芸会に採り入れたこと。私のような人間を抜擢し激励してくださったこと。長崎先生はすばらしい先生です。」

私にとって、初めて知る若き日の父の姿ではあったが、又一方、父らしい話だという気もした。石黒教授はおずおずと、「老先生は今でも村松においでしょうか。是非ともお目にかかりたいのですが」とおっしゃるので、「はい、元気で暮らしています。父も喜ぶでしょうから、どうぞお出かけになってください」とお答えした。

こうして四十数年ぶりに石黒教授と父とが再会を果たすことができた。石黒教授は一冊の古びたアルバムご持参で村松の家を訪ねてくださった。そのアルバムには、何と、その歌舞劇の写真がはってあった。既に黄ばんではいたが、その写真をはさんで、父二〇歳、石黒教授一二歳当時の思い出話が数刻にわたって続いた。

台湾での自由教育

◇明

台湾の公学校の先生になった大おじいちゃんは、まるで水を得た魚のように、大空に放たれた鳥のように、いきいきと大活躍を始めた。一九二五年（大正一四年）六月一六日、基隆郡四脚亭公学校、一九二七年三月二一日、同郡五堵公学校友蚋分教場主任訓導を経て、一九二九年三月三一日、まだ二六歳の若さで同郡双溪公学校教頭となった大おじいちゃんは、早速、青年教習所指導員として社会教育に尽力し、基隆郡下にその名を知られる存在となったんだね。

大おじいちゃんは、なかなか多才な人で、現地の若い人を集めて青年団を結成させ、その青年団活動をドラマ化した放送劇を作り、それを自分で演出し、その青年団員たちを出演させて、台北放送局からラジオ放送している。まだラジオそのものが珍しく、ましてラジオドラマなんぞ殆んど手が付けられてないジャンルだったから、郡下どころか台湾中の大評判になった。全く驚きというほかないね。

そうかと思うと、団体体操にも力を入れ、台北州下の青年団の体操競技で第一位となっている。まさに八面六臂の大活躍だね。この時は、次男の真人叔父さんも生まれていたから、幼児三人を抱えた若夫婦、さぞかし家庭的な面でも大変な時期だったに違いない。

◇雅江

すごいわね。でも、きっと大おばあちゃんの内助の功もあったんでしょうね。

◇明

そのあたりのことは、われわれ子どもには良く分からないが、おやじの帰宅がいつも晩くて、たまには夫婦喧嘩もあったみたいだね。何となく覚えているような気もする。何しろ、植民地台湾の片田舎だから、内地人（日本から移住した人）といえば、学校の先生とか、警察官とか、役場の吏員とか、合わせて一〇戸そこそこだったのではないか。おふくろは子どもの世話に追われるばかりで、おやじだけが頼りなのに、おやじは家の中のことはほったらかし、良い意味ではおふくろに任せっぱなしだった。おふくろとしては内助というよりも、自分自身が心細かったのではないか。

おふくろは、「おんば日がさ」というほどではないにしろ、男一人、女五人の末娘として生まれたので、生活の苦悩を全く知らないで育った人といって良かろう。

◇康子

そんな大おばあちゃんが良く台湾移住を承知したものだね。

台湾を知らないままに

◇明

台湾がどういうところか、台湾での生活がどういうものか、おふくろにはあまり判ってなかったのではないか。判ってなかったというよりも、それほど根掘り葉掘り聞こうとしなかった。それは夫への信頼と渡台への不安とのなえまざった心境で、そう単純に割切れ

るものでもなかっただろう。

台湾に着いてみて、そして、いきなり辺地に赴任させられて、これは大変なところに来たとの実感を秘かに抱いたかも知れない。

五堵や双溪の家は学校の官舎だったが、台湾の家はどこでもそうであるように、ヤモリが夕方になると現われた。ガラス戸や天井にへばりついて、そっと虫に近づいてはパクッと食い付く。時にはキィキィと鳴くこともあって、その無気味なこと。

◇雅江

まあ、いやだ。大嫌い。

◇明

それどころではない。双溪の家では、トイレに蛇が出て来たことがあった。蛇、トカゲ、蛙の類は人家の近くに良く現われるし、種類も多い。特に毒蛇には気を付けなければならない。だから、小学校の理科の教科書には、毒蛇の見分け方、見付けた時の対処の仕方が載っていた。

大きな角を持った水牛が放し飼いされていて、「水牛には赤い物を見せてはいけない」といったことも、四、五才の頃教えられた。

◇雅江

あぁ、いやだ、いやだ。第一、あんな暑い所、私は行きたくないわ。北海道か、樺太なら良いけど。

◇明

台湾のことを良く知らなかったといえば、当時の台湾在住の内地人は、台湾が植民地だということ、そして、自分たちがその植民地の先兵の任を担わされたということを、どのていど自覚しえただろうか。

台湾同化政策の先兵として

当時の大日本帝国の台湾統治の基本理念は、フランスのアルジェリア方式から範をとったという。王育徳『台湾、苦悶するその歴史』（弘文堂、一九八五年発行）によれば、

住民の風俗習慣、言語を徹底的に本国に同化するのを究極の目標とし、その手段の一つとして、本国民の移住を奨励した。本国民の移住は、アルジェリアのコロンほどの繁栄を見なかったが、同化政策は結果的にいって、相当の成功を収めた（中略）。

かくして、台湾人は強制的に近代社会に投入され、好むと好まざるとにかかわらず、近代化の恩恵を蒙ったが、もちろん、日本本国が台湾から得た利潤は、

年間二千万円に達した砂糖の蔵出税、各種企業の莫大な配当金など、簡単に見積もれないほど大きいものがあった（原文のまま）。

この王育徳は一九二四年、台南市に生まれ、ボクと同年次に台北高校文甲（例の邱永漢と同級）を経て東大文学部に学んでいる。台湾独立連盟中央委員、明治大学教授の要職にあったが、二、三年前惜しくも死去したとのこと。私は一面識もないが、彼の著書を通じて、その人物にうたれている。できたら会って話したかった人間の一人である。

◇郁夫

台北高校には台湾の人も入学できたの。

◇明

そうね。さきほどの近代化政策の一つとして、台北高校は台湾総督府立ということもあって、内地人、台湾人が机を並べて授業を受けていた。台湾人の方が語学、数学の成績はうんと良かったようだ。現在の台湾でも、台北高校卒業の台湾人が枢要な地位についている。先日、総統に就任した李登輝もそうだ。

話が随分行ったり来たりしたが、要するに、おやじからいきなり渡台の話を聞かされたおふくろは、反対も賛成も、うんもすうもなく従わざるをえなかったであろう。

おやじたちは多分恋愛結婚だったろうと推測しているが、いかに恋愛結婚とはいっても（あるいは恋愛結婚だからなおのことか）、当時としては、夫が決意すれば、妻はついていく以外になかったのではないか。おやじの手記の中でも、「両親を説得して」とはあるが、「夫婦相談して」とは書いてないね。

神戸港から笠戸丸で出港するまでの数カ月間のあわただしさについては、ボクなりにいずれ明らかにしたいと思っているが、とにかく、おやじはでっかい夢を果たしたかった。それが渡台の決意をさせたのは間違いないと思っている。おふくろも、それに従うほかなかったのだろう。

明のラジオ放送

◇明

そこでね。今夜は家族みんな揃ったためったにない機会だから、とっておきの話をしようか。

実はね。このおじいちゃんも、その頃、ラジオ放送しているんだよ。それも唱歌を唄ったんだ。

◇一同

うっそう!!

◇明

嘘なもんか。はっきり覚えているんだから。確か双溪小学校の三年生だったね。小学校といっても双溪という街に住んでいる内地人の子ども二〇人たらずで、一年生から三年生までの低学年が一クラス。四年生から六年生までの高学年が一クラスという複式学級の小さな学校だった。

そこから多分五、六人が選ばれて台北放送局まで出かけた。往復どれくらいかかったか、あまり覚えていないが、泊まった記憶がないので、恐らく日帰りだったのではないか。双溪駅は、台北と基隆の間の八堵駅で乗換えて東に向かうローカル線にあるが、距離は六〇キロていどのようだから、その頃の汽車でも日帰りできた筈だ。

おそるおそる入れて貰った放送室の赤いジュウタンが、今でもまぶたに残っている。当時はテープレコーダーなんて便利なものがなかったから、当然、生放送だったので、絶対やり直しが許されない。コトッとの物音一つ立てられない、大変な緊張をしいられた。さっき話した双溪青年団の放送劇も多分同様だったに違いないね。

双溪の家にはラジオがなかったので、おふくろは公学校宿直室まで駆け付けたが、運の悪いことに、放送予定時間だというのに、ラジオが故障して、ピイピイ、ガーガーいうばかり。とんとんと叩いたら、いきなり「オーナラ」と聞こえたのでびっくりした。

それは、「母さん、さようなら、さようなら」という小学校唱歌の最後の部分だった。ボクも不思議なもので、ここのところだけ、今でもふしを付けて唄うことができるのに、その前の方は、ふしも歌詞も全く思い出せない。題名もわからない。きっと、おふくろから昔語りに何べんも「お母さんはお前のオーナラしか聞かなかった」と聞かされたからであろう。

恐らく、このラジオ放送も、おやじの教育活動の一環だったに違いない。

（ながさき　あきら＝にいがた県民教育研究所会長）

◇『読者からのたより』欄への投稿を歓迎いたします。本誌に対してのご意見やご注文、子育てや教育についてのお考え、毎日の生活のなかで感じられていること等々を、自由にお書きください。